■特別寄稿

学び、歩いた道

小坂樹徳（中38回）

●こさか・きのり
大正10年生まれ。昭和9年3月、座光寺尋常小学校卒。同14年3月、飯田中学校卒。同17年3月、松本高等学校卒。同20年9月、東京帝国大学医学部医学科卒。同20年10月、東京大学医学部助手。同34年8月、東京大学講師（医学部）。同41年4月、東京女子医科大学教授（内科学）。同44年4月、東京大学教授（医学部内科学）。同57年10月、虎の門病院院長。文部省学術審議会、厚生省公衆衛生審議会等の専門委員。第13期・14期日本学術会議会員（第7部長）、日本内科学会理事長、日本糖尿病学会理事長他内科系諸学会の役員、世界保健機関（WHO）糖尿病専門委員、（財）日本糖尿病財団理事長等を歴任。内科学、内科診断学、医学概論、糖尿病学、現代医療論等の著書多数。現・東京大学名誉教授、虎の門病院名誉院長。勲二等瑞宝章（平成9年春）受章。

激動下、学窓に学ぶ

昭和三年、私は座光寺小学校に入学した。昭和の大不況で信州の田舎は貧しく、持ってくるのは文字通りの「日の丸弁当」であった。子供達は家業を手伝いながら、山や川や野原で仲良く遊んだ。学校では「読み、書き、そろばん」と「人の道」を教えられた。懐かしい思い出は数多い。

満州事変が勃発し、やがて出兵する村の青年を元善光寺駅で見送るようになり、次第にその回数が増した。卒業の折、受け持ちのK先生は「どんな仕事についても、なくてはならない人になれ」と諭された。幼い私共がどれ程理解したことか、しっかり脳裏に残っている。

中学校では、新しい教科も加わり、幾人かの先生が熱心に教えてくれたが、学問に対し、少年達の情熱を掻き立てるには至らなかった。

足が冷えきって痛んだ剣道の寒稽古、森青蛙を研究していた生物のM先生のお伴をして、上郷の山中で一夜を過ごしたことなどは良い思い出だ。

中学校では一年生から軍事訓練が行われた。上級生になって銃を担ぎ、軍歌を歌って行軍し、一泊したこともあった。戦争は支那事変へと拡大し、満蒙開拓義勇団(軍)が組織され、『おお、満州信濃村』が謳われるようになった。

校舎の屋上で腕っ節の強い上級生が、「お説教」と言って下級生を苛めたが、学校がそれを見逃していたのは大変いやだった。

旧制高校には中学とは全く違う学問的雰囲気があった。教授陣の多くは夫々の学問分野の研究者でもあり、その学識を背景にした講義は学生を引きつけ、魅了させるものがあった。後に、哲学、ドイツ文学、数学で東大教授になられた先生が幾人も居られたのである。

人間形成の基本である自治や自主が重んじられた。自由は何故尊重されねばならないのか、人はどう生きるべきなのか等々、容易に解答の得られない諸問題をしばしば夜遅くまで語り合った。「赤だ」として検挙され、投獄された友人も出た。そして三年生のときの十二月、わが国は大東亜戦争に突入した。

大東亜戦争の開戦を告げる新聞

東大は、学問の伝統と、それを創造的に継承発展させようとする学風を感じさせた。講義も実習も、各専門化した学問体系を基本に、教授自身の研究を織り交ぜたもので、重厚であった。

医学の歴史は古いが、近代医学は自然科学的手法を用いて、病気の科学として発達してきたこと、従って医学・医療技術を修め、病態を科学的に分析し、正確に診断し、適正に治療しなければならないことを学んだ。

一方、戦局はミッドウェイにおける海軍の敗北によって、決定的に厳しくなった。軍医育成が急務となり、医学教育はどんどん短縮された。……そして学徒出陣！

今でも時折放映される、あの雨の神宮外苑の出陣式の最前列で私も行進した。東條首相が何を訴えたか全く記憶にないが、例のかん高い声だけが耳に残っている。B29の襲来下に（仮）卒業試験を受けた。三月に東京大空襲があった。

昭和二十年四月、軍医候補生として陸軍軍医学校に入隊した。国のため、老人婦女子を守るため、戦い死ぬ覚悟はできていた。區隊長は開口一番「爾今、貴様らの命

は俺が預かった」と叫んだ。北支戦線帰りの気性の烈しい若い軍医中尉だった。

倒れた者を背負って行軍を続けるなどはお茶の子で、一番辛かったのは、「切磋琢磨」といわれた、さしたる理由もなしに戦友同士が向かい合って殴り合う「対向ビンタ」だった。「普通の人」を「人殺し」にするのが軍隊教育と受けとめた。火薬を背負って米軍のM4戦車に突っ込む訓練が繰り返された。

二ヶ月の教育後、独立大隊の先任軍医として、豊予海峡の守りのために、大分県佐賀の関の海岸に張りついた。食糧不足で兵隊の体重は減っていった。米軍機の爆撃や機銃掃射を受けたが、火器は大隊砲一門のみでは戦う術はなかった。米軍機は毎日、岩国の工廠を爆撃するため、豊予海峡の上空に飛来した。

福岡から来た参謀が集まった将校を前に、「広島に特殊爆弾（原爆）が投下された。戦局は急変するだろう」と伝えた。山の中で玉音放送を聞いた。そして終戦を迎えた。わが国はどんな道を歩むのか不安だった。復員して九月、医学部を卒業した。

医学徒として歩いてきた道

学生時代から尊敬していた坂口康蔵教授の下で、内科医の研鑽を積むことにした。この教室は明治二十六年、わが国で最初に創られた内科教室で、臨床を大切にする伝統があった。言葉遣い、患者さんとの接し方など、医師としてのマナーをまず教えられた。

どんな患者にも親切に接し、その時代になし得る最高の医療を提供するのが医師の責務であり、患者さんへの最良のサービスであること、それは決して容易ではなく、厳しい研修によって初めて近づき得ることを学んだ。

医学・医療技術は常に進歩しているが、なお不確実な体系であり、未知の分野があまりにも多いのである。この実体験は、若い医師の研究意欲を駆り立てる。私共は臨床と研究に明け暮れした。研究室はまさしく〝不夜城〟だった。

食糧難であり、経済的にも全く貧しかったが、学究生活ができることはこの上もなく幸福だった。研究費は、昭和二十年代はアメリカの百分の一程度であったが、意気盛んだった。

数年経った頃、小学校時代の友人がわざわざ上京してきて、「皆で相談したが、田舎に帰ってお父さんと一緒にやってほしい」との主旨の話、あの美しい自然に恵まれた伊那谷で、共に生まれ育った人たちの健康に奉仕できればとも考えて医師を志したこともあり、有難く感謝

した。しかし、優れた内科医としてお役に立つには、優れた研究者でなくてはならないと思うようになっていた。すでに幾人かの後進と研究を進める立場にもなっていた。

私はインスリン分泌調節機構と糖尿病の成因をメインに研究していたが、その成果は糖尿病の早期診断、予防、治療の基本とも関連し、世界の評価を受けた。

世界保健機関（WHO）の糖尿病専門会議に出席（ジュネーブ 1980 年）

医学部学生は将来のわが国の医学・医療を担い、世界の学者とともに発展させる人材である。教育は教授の果たすべき使命の一つとして、精一杯努力したつもりである。

多くの俊英が教室員になり、共に学んだ者の中から五十余名の教授が輩出し、活躍している。よき師、よき同僚、よき後進に恵まれることは、人生の幸福と感謝している。

わが国の経済的発展は学術の進歩の底辺を力強く支えている。医学研究はアメリカに次ぐ水準にある。終戦時の彼我の大きな落差を振り返ると、感慨深いものがある。

医師は患者さんから医学を学ぶという。医療が医療理論に基づいて行われるのは当然であるが、それのみでは不完全なのである。

私は数年前から、患者さんから人生を教えられていると強く思うようになった。人生の終焉を迎え、医の道を謙虚に歩みながら、自己完成に努めたいと願っている。

［後記］

同郷に生まれ、激動の時代に青少年時代を過ごし、戦後は医学徒として歩んだ者のつたない懐想とお読み頂ければ幸いである。

平和な豊かな社会の中で、自由に自己形成をめざしうる今日の若者の幸福を思う。

そして戦い合うことのない隣人愛に満ちた人間社会を心から願っている。